

# 大学キャンパス共有空間における学生の居場所の景観設計

岐阜大学 学生会員 OVO THI HONG NHUNG  
岐阜大学 正会員 出村嘉史

## 1. はじめに

現在の岐阜大学では休憩時間の学生の居場所は、教室以外にほとんどなく、授業前には異常に混雑する風景がよくみられる(図-1)。この例が示すように、現在のキャンパスは学生の教育の場として、さらには学生が自由な時間に過ごす適切な空間としてのプランニングが不足している。そのため、学生の居場所を創造する必要があると考えられる。

法人化になっている伴い多くの国立大学はキャンパスマスタープランの策定や既存の施設の改善等を大学施設整備の充実に向けて取り組んでいる。その中で、学生環境だけでなく学生の生活環境の観点からも改善する必要があると認識されている。特に居場所のない大学生に対して、キャンパス共有空間における居場所づくりを課題であると思われる。



図-1 授業を待っている学生の様子

居場所には心地よさを形成する景観要素として「隠れ場」と「眺望」があると考えられる。そこで本研究は「隠れ場」と「眺望」に着目し、学生の居場所の景観設計をすることを目的とする。ここでの景観設計とは、実現可能な最低限の景観改善をルール化することである。これができることによって、今後の岐阜大学キャンパスの景観設計の基本的なルールが作られ、新しいキャンパスマスタープランが作られる際、きちんと計画が入れられると思われる。



図-2 アプルトンの隠れ場と眺望メーヅ図

## 2. 着目した視点と対象地

イギリスの地理学者であるアプルトン<sup>5)</sup>は「生息適地は人間にとって美しく見え、美的満足感を得ることができる」と記している。これは動物にとって生息適地は、「隠れ場」と「眺望のある所」で、人間の外向きの欲望と内向きの欲望を空間的に捉え、視覚的なものとして捉えられる風景が、眺望と隠れ場だという仮説である。(図-2)ここでは隠れ場と眺望は実際にそのような空間となっているかどうかよりも、風景の中で見る者に象徴的にそのような空間であると捉えられることが重要だとされている。樹木などの生い茂る影や安全そうな場所があり、そこからの眺望が想像できれば居心地のよさそうな場所と認識される。

キャンパスは、大学の教育研究などの活動を支えるとともに学生と教員が生活を送る空間である。生活の場として学生が自由な時間を過ごす空間と、学生の勉学の意欲を促す空間が必要だと考えられる。

そのため、本研究では学生の自発的な行動を促すことを可能にする居場所について景観設計するために隠れ場と眺望を考慮した空間構成に目を向け、大学施設の配置をルール化していくものとする。これができることと今後の新しいキャンパスマスタープランが作られる際、計画を適切なデザインを反映で

きると考えられる。

### 3. 本研究の位置づけ

学生の居場所に関して、孫ら<sup>1)</sup>は2つの大学施設を取り上げて、主に1年生と2年生を対象にアンケート調査を行った。その結果、孫らによれば共通教育施設に含まれる図書館や福祉施設等が別々に計画されるのではなく、互いに機能や空間の補完関係を持ち、豊かな生活を支える学生の居場所としての役割が必要だと記された。

眺望に関して、水谷ら<sup>2)</sup>は京都の庭園に着目し、そこにおける山の眺望景観の特徴を説明する指標を提示した。出村ら<sup>3)</sup>は京都の清水・八坂・下河原・円山において、隠れ場と眺望にとって説明される休憩空間が階層的な空間構成の中に位置づけられることを示した。つまり、これらの研究は山の眺望や隠れ場が、都市の景観や庭園にどのような影響を与えるのかを明らかにした。

これらの知見を実践のための手続きとして編集し、岐阜大学において適用を試みる。

### 4. 研究の内容

大学キャンパスにおける学生の「居場所」に関して、以下の様なステップによって景観設計の論理を構築する。

ステップ1：現状の岐阜大学の柳戸キャンパスの共有空間を把握し、以下の点において、隠れ場と眺望を考慮した居場所の実現が可能である箇所を選定する。(図-3)

1. 外部からの視線を避け、居心地の良い空間の囲いが設定できる
2. そこからの広い眺望が得られる位置にある
3. 以上のことを可能にする建物配置や外部空間の構成になっている

これらの項目は、可能性について述べているもので、現状において障害物や壁などによって眺望が阻害されている場合においても、改修によって得られるポテンシャルがあればよいと考える。

ステップ2：このような空間を学生の居場所として、個別に改善方策を考え、適切な構成となるよう空間デザインを提案する。壁や障害物を取り払う、

居場所を何らかの方法で囲う、そこへのアクセスを考えるなどの手段が考えられる。

それらのステップを踏まえて、現状の空間より学生の居場所としての様々な視野が広がりし、快適な空間を作ることができると考えられる。

### 5. おわりに

本研究は、大学キャンパス共有空間が学生の生活場として快適で勉強集中できるスペース、自由な時間の過ごす空間として、最低限実現可能な景観設計の規則を提示するものである。学生が教室にいる時、視野は集中するものの、教室を出ると視野は広がる。視野が広がる空間を景観設計し、隠れ場と眺望を作り出すことで、学生の読書、思考、休憩等の自発的な行動を促すと考えられる。



図-3 本研究の着目する空間のモデル

### 参考文献

- 1) 孫イブン、今井正次、恒川和久、谷口元、田中裕伸「学生の居場所の視点からみる大学の共通教育ゾーンに関する研究」日本建築学会大会学術講演概集 2006
- 2) 水谷壮志、出村嘉史、川崎雅史、樋口忠彦「京都南禅寺界隈の庭園における山の眺望に関する研究」景観・デザイン研究講演集 No1 2005
- 3) 出村嘉史、馬田宣雄、川崎雅史、樋口忠彦「清水・八坂・下河原・円山における隠れ場と眺望に関する研究」景観・デザイン研究講演集 No2 2006
- 4) J. アブルトン『風景の経験』法政大学出版局, 2005